

古代山城サミット
山鹿・菊池大会

講演会記録集



■第1部 学習発表

山鹿市立城北小学校6年生「鞠智城跡の魅力を学んだよ」

○〈出演者名〉

霍口 友萌 城野 公彦 坂本 典子 渡邊 琴乃 松岡 隆太
立花 千夏 三浦 真帆 坂本 唯人 木庭 悠斗 矢野 華帆
隈部 巧斗 隈部 葵 松岡 咲江 原口 大河 小柳 雄臣
佐藤 玲誠 宮本 未菜

○〈制作スタッフ〉

統括 学校長 角田 憲隆
指導 古奥 麻美
手話指導 井上 由紀子

○〈発表内容〉

児童たちが鞠智城について学習した成果を劇形式で発表しました。

始めに「ふるさとを想う歌」の1番を歌い、最後に、2番、3番を手話つきで、児童全員で歌いました。

発表内容は鞠智城のことを良く調べてあり、すばらしく、感動するものでした。

「ふるさとを想う歌」は平成15年度の6年生が作った詞です（林田隆紀 指導）。当時おられた先生方が作曲、編曲されました（作曲：横手和子、編曲：三木彰子）。

この歌は城北小で歌い継がれ、児童の大好きな歌です。

■第2部 講演

- ① 矢野 裕介「鞠智城跡の最新調査成果」…………… 2
- ② 西谷 正「ここまでわかった鞠智城」…………… 6
- ③ 田中 哲雄「歴史公園としての古代山城の整備」…………… 12

■第3部 パネルディスカッション …………… 17

司 会：佐藤 信
パネラー：西谷 正、田中哲雄

城北小学校 学習発表の様子 平成23年10月7日 八千代座(山鹿市)



劇の始まり



鞠智城についての劇



「ふるさとを想う歌」を手話つきで歌う

■第2部 講演

① 鞠智城跡の最新調査成果

歴史公園鞠智城・温故創生館 参事 矢野 裕介 氏

みなさん、おはようございます。ご紹介に預かりました、熊本県立歴史公園 鞠智城 温故創生館の矢野と申します。よろしくお願いたします。本日、私の方からは鞠智城跡の最新調査成果ということで、昭和42年から手がけております鞠智城跡の調査成果の現在の状況についてお話をさせていただきます。

さて、この鞠智城跡なのですが、奈良時代から平安時代前期にかけて編纂された六国史に記載のある山城でございます。まず、『続日本紀』文武天皇2年の条「大宰府をして大野、基肄、鞠智の三城を繕い治めしむ」という記述が、一番最初に出てくる鞠智城の記述でございます。これはどういう意味かと申しますと、福岡県にあります大野城、それと佐賀県、福岡県にまたがっております基肄城と同時に鞠智城を修理をしたという内容を表しております。鞠智城の場合、残念ながら築城をしたという記録はございませんけれども、大野城、基肄城が『続日本紀』の前に書かれました『日本書紀』の天智天皇4年、西暦でいいますと665年に築城したという記録が残っておりまして、鞠智城も同時に修理したのですから、その頃に築かれたというふうに考えられております。

その後も、平安時代になりますけれども『日本文徳天皇実録』天安2年2月、6月の条、『日本三代実録』元慶3年3月の条にも、「菊池城院」あるいは「菊池郡城院」という名前で登場いたします。こちらは現在の菊池市の「菊池」という文字を使って記述されています。最後の、『日本三代実録』元慶3年、西暦の839年を最後に文献上から姿を消しますが、修理をしてから元慶3年の記事まで少なくとも181年間、鞠智城があったということがこの六国史からお分かりになれるかと思いません。

この鞠智城の位置ですが、熊本県の北部に位置しております菊池川、

阿蘇の北外輪山から有明海に注いでおります川ですけれども、その河口から直線距離で約30km^{キロメートル}内陸に位置しております。実は、その役割といったしましては、南の有明海の方から攻めてくる敵を迎え撃つ位置にあると同時に、先ほど城北小学校6年のみなさんがお芝居で見せていただきましたけれども、当時、福岡県には「大宰府」という大和朝廷の出先機関がございましたが、有事の際その周辺に食糧だとか物資、あるいは兵士だとかを後方から補給する支援基地だったというふうに考えられています。

鞠智城の城域なんですけど、古くは広域説と狭域説がございましたが、現在では、周りの長さ^{キロメートル}が3.5km、面積^{ヘクタール}で言いますと55haの範囲を現在、遺構も見つかっておりますので真の城域としておりまして、それを含めた64.8ha^{ヘクタール}が現在国の史跡として指定されております。ちょうど、山鹿市と菊池市の市境にまたがった城でございます、城域の9割が山鹿市、城域の1割が菊池市となっております。城の中心は山鹿市に入んですが、菊池市にも、深迫門と堀切門という重要な城門が2つ入っております。

城の周辺なんですけど、こちらが城野松尾神社という神社があります。これは大同2年、西暦807年、鞠智城が在った時代に創建されたといわれている神社でございます。京都太秦の松尾大社が有名ですが、そちらから分社をされたというふうに伝わっております。その西側に古代の条里の跡が推定されております。鞠智城の構造ですけれども、南の方に



深迫門、堀切門、池ノ尾門など南に集中して門が確認されています。また、南側と西側に土塁線が確認されています。長者原地区、上原地区には、72棟の建物が見つかっており、その北側の谷部には、古代山城では今の

ところ鞠智城跡でしか明確に確認されておりませんが、貯水池の跡があります。

次に、発掘調査の成果を見ていきたいと思えます。まず、長者原地区ですが、現在は1m程盛土をしまして、その上に復元建物を建て芝生広場として見学者のみなさんにご利用いただいております。この地区を中心に整然と配置された72棟の建物跡が見つっています。この長者原地区からは、現在のところ古代山城では例を見ない、中心に心柱を置いて3重に柱が巡る八角形建物跡をはじめ、直に土中に埋め込む掘立柱建物跡、土台石の上に柱を置く礎石建物跡が見つっています。また、礎石の建物の中でも城内最大とはる宮野礎石ですが、特殊なものを納めていたのではないかとされる倉庫になります。

次に、城門にですが、深迫、堀切、池ノ尾で門礎石が見つっています。そのうち深迫門礎石ですけども、推定4tの重さがあったと考えられております。門礎石の縁に穴がありますが、門の扉の軸を受けるための穴になります。また池ノ尾では水門が見つっています。水門というのは城内から湧き出た水、あるいは雨水を城外に流す排水施設のことを水門といいます。城壁に直行するような形で暗渠状の溝が通っており、ここを通過して城外に排水する構造となっております。昨年度の調査で、石積みみの城壁があったことということも明らかとなりました。

次に、土塁ですが、土塁の盛土とその裾野に石を並べてさらに、土塁の前面に柱の穴が見つっています。土塁の造り方を見ますと、まず、その地山をL字状にカットし、次にこの前の柱穴を使って柱を立てます。後ろにも柱を立て、前の柱との間に紐を通して補強します。前面の柱と柱の間に板を渡して、墻板として、地山との間に土を詰めてさらに、板を渡して土を詰める、それを繰り返しながら土塁を造ったということが分かっております。

最後に、貯水池ですが、5300㎡の池があったということが調査で明らかになっております。南北に長い池ですが、池の中には水汲み場の跡ですとか、建築用材を水漬した貯水場跡などが確認されております。平成20年10月23日には、池尻にあたる部分から百済系の銅造菩薩立像

② ここまでわかった鞠智城

九州歴史資料館長 西谷 正 氏

みなさん、おはようございます。今、ご紹介がありましたように、私は今日、「ここまでわかった鞠智城」というお話をさせていただきます。

只今まで、城北小学校の小学生のみなさま、それから鞠智城温故創生館の矢野様から鞠智城に係わるお話がございましたので、みなさまにおかれましてはご理解をずいぶん深められたのではないかと思います。それを踏まえて、私なりにおさらいを含めて少し整理しておきたいと思っております。

昨年、奈良では平城遷都1300年祭が行われ、都が飛鳥、藤原の地から、現在の奈良市の平城京に移ってまいりましたが、どうも、その平城遷都より46年前に大野城、基肄城、そして鞠智城が築かれているらしいということなんですね。鞠智城の年代につきましては、大野、基肄城よりも33年後の文武天皇2年の記事に記録としては出てくるわけですが、大野、基肄城と同時に作られたであろうということは、只今も矢野さんがお話になったとおりでございます。そういう後の新しい記録ではございますが、大野、基肄城と一緒に修理したということは、おそらく同時に築かれたのであろうと考えます。このことは大野城から発見されている瓦がございまして、百済の系統の瓦が出ているんです。それと同じ形式の瓦が鞠智城でも出ていますので、私は7世紀後半に、大野城、基肄城と共に鞠智城が作られたということは間違いないだろうと、そのように考えております。

こういった日本書紀なり、続日本紀なりに出てくる山城につきましては、朝鮮式山城（ちょうせんしきさんじょう）と申しております。これは日本書紀の天智天皇と続日本紀の文武天皇のところに出てくるんで朝鮮式山城と呼んでいるのです。そういう記録に現れるだけではなくて、日本書紀によりますと大野、基肄城の築城に際しまして、百済から渡っ



てきた技術者によって作られたという記録があります。その記録通り、大野城と基肄城を百済の山城と比較しますと共通点が多々ございます。そういった意味で朝鮮式山城と言っているんですが、私は厳密に言えば百済式

山城と言った方がいいのではないかと考えております。それはともかくとして、朝鮮式山城ともう1つ山城があるわけですね。これがいわゆる神籠石系山城というものでございます。この年代については諸説ございますけれども、私は朝鮮式山城は天皇でいえば天智天皇の時代。それに対して、その前に斉明天皇がご在位でしたけれども、おそらく斉明天皇の時代に神籠石系の山城が築かれ、天智天皇の時代になって朝鮮式山城が作られたと連続性があるのではないかと考えております。

この古代の朝鮮式山城につきまして、みなさまのお手元の資料をご覧くださいますと、3頁のところに地図・分布図がございまして。北部九州からここ、中九州そして瀬戸内海を通じて近畿地方という、西日本一帯にまで広がっているものでございます。日本の歴史の中でも山城が発達するのというのは、後の中世の時代もございましてけれども、古代に大きな特色がございまして。こういった山城は日本列島だけではなくてですね、お隣の朝鮮半島にも分布しているわけがございまして。そういう意味では、アジア、特に北東アジアにおいて、朝鮮半島全域、最も北の方は現在の中国まで分布していますが、朝鮮半島全体、そして対馬、日本列島西部という広い範囲に分布しているわけです。

時代的には同時期のものでして、これらの山城は当時の一連の朝鮮半島の内部の政治情勢、あるいは朝鮮半島と日本列島に加えて中国大陸という北東アジアの国際情勢を反映した所産であると言ってしまうと差し支えないと思っております。この国際情勢という意味では、朝鮮半島で

はお手元の7世紀後半の東アジアと書いてあります資料をご覧くださいますと、朝鮮半島北部の高句麗、南部西海岸寄りの百済、東海岸よりの新羅、その間に挟まって加耶、日本では任那と言ったりしますがこういう4つの政権、国に分かれ分裂し互いに覇権を競っていたという。そういう状況の下で実際に戦争が起こったり、あるいは政策的に連合、合従したりとかですね、そういうことがございました。そういう分裂国家時代に緊張状態を反映してそれぞれの地域で山城が異常に発達するというわけがございます。それに対して日本の西日本に分布している古代山城につきましては、朝鮮半島内部の事情とは少し違ひまして、ご承知の通り百済が減び、それを滅ぼした新羅や唐の連合軍が攻めてくるかもしれないという、仮想敵国視して防衛を固めました。これが日本の山城の大きな特徴でございます。

そういう古代山城につきましては、ここ鞠智城を始めとして西日本一帯に分布しているわけですが、この鞠智城の発掘成果については只今報告された通りでございます。昭和42年といえますから、今から46年前に始まりました。実は、その翌年に福岡県では大宰府を始めとする、大宰府、大野城の発掘調査が福岡県教育委員会によって本格的に始まりました。それに先立つ前年から、この鞠智城の本格的な調査が始まっているわけがございます。途中、ちょっと中断がございましたけれども、昭和61年から再び本格的な鞠智城の発掘が行なわれ、昨年までに32次という長期に渡って発掘調査が行なわれました。その調査成果を只今矢野さんがかいつまんで、簡潔にご紹介されたところでございます。そういう意味では、日本の中でも古代山城について大野城、そしてこの鞠智城というのは調査の歴史といえましょうか、成果が非常にあがっているところでは共通しております。その点でこの大野城と同じように、これまでの山城の研究というと最も大事な出入口、城門ですね、それと城壁。そういったところの調査にこれまでは主眼が置かれております。そういうことも踏まえましてね、昔は史跡に指定する時に城壁のところだけ指定して内部を全然指定しなかったという例もございました。そういうこれまでの調査の歩みに比べて、大野城、鞠智城は内部の状況が非常

によく分かっていると言えましょう。非常にという語弊がありますが、相対的に見てよく分かっているという共通点がございます。しかし、もちろん大野城とは違ったところが鞠智城にはございますが、その辺の要点を三つに整理しておきたいと思えます。

まず、鞠智城の特徴の一つは高さの問題です。だいたい山城というとき300mメートルくらいの高さの所にあるんです。韓国などに行きますとだいたい海拔600mメートルとかで、一日一カ所を見るのが精一杯というところが一般的です。そういった高い所に築かれているという特徴の中で、この鞠智城につきましては下の平地からの比高が100mメートルという非常に低いところに立地しているという点が特徴でございます。そして上に登りますと、平坦地がずいぶん広いことが発掘調査を通じて分かった事です。私は非常に注目しているのは、先ほども城北小学校のみなさんが発表されましたように、穀物を貯蔵したり、武器・武具を保管した倉庫があったり、兵士の居住する場所があったりと、いろいろな建物が配置されているという事が分かって参りました。現在、その一部が復元されたり、あるいは建物のあった所を地上で表示されたりしていますが、そうされていない発掘された遺構の中にどうもお城全体を管理する役所のような建物が、しかもコの字型に配置されていたらしいという発掘調査の所見もございませう。そういう調査は大野城では見つかっていないということですね。

もう一つ、大野城では南の方に都府楼と呼ばれる政治の中樞部がございまして、その後ろの山に大野城があるわけですね。そのように言ってみれば、麓の平地城と山城というこの二つ、セットの関係にあるというのが大野城の特徴です。しかし、この場合は、比較的低い山の上の広い平坦面にそういういろんな機能を備えたものがそこに在るということで、言ってみれば山城と平地城が同じ場所に営まれているのが大きな特色ではないかこのように思っております。

それから二番目の問題としましては、大野城にはない、見つかっていない八角形の建物と貯水池が見つかっておりますね。八角形建物は山城では日本で唯一見つかりました。南北に二つ建っていた。そのうちの

つが今、現地で復元されているわけですが、そういう八角形建物、そしてお城の北よりの所に規模の大きい貯水池もしくは水源などがございます。山城というのは籠城する所でございますので、水が食料と共に欠かせないんですね。大野城におきましても頂上部に鏡の池という小さな窪みというか池がございまして、別の所では石を組んだ井戸、あるいは沢などがあるということはあるんですが、鞠智城のように本格的に大規模な池を作って、そして水源を確保したという例は日本ではまだ見つかっていません。おそらく地形的にいても他ではないのではないかと思います。そういった特色がございます。

もう一つは、これもみなさんよくご承知のことと思います。木簡と仏像が見つかったことですね。木簡につきましては、秦人、そのあとはおそらく米であろうと。その次に五斗と書いてございますから、秦人といういわゆる渡来人が、おそらく鞠智城に米五斗米を納めた荷物に付けていた、荷札でございます。そこで秦人という渡来系の人の存在を認めることができるのです。この秦人については、当時どこから渡来してきたかということは議論のあるところなんですけど、百済か新羅か、はたまた中国か。状況証拠から言いますと、おそらく百済の可能性が高いということでございます。そしてもう一つは、これは鞠智城の全国に、アジアに誇れる素晴らしい仏像が見つかったというこの二点ですね。これも専門家の大西先生の研究によりますと、百済系の仏様であるということは明らかでございます。そういったことが分かかってきて、日本の古代山城に関する研究について

基本となるべき情報が、40年以上に渡る調査によって豊かにもたらされたということが言えるのではないかと考えております。百済人の技術者が指導して作ったと先ほど申しましたけれども、こ



百済系菩薩立像 (左) と墨書文字のある木簡 (右)

の百済も含めた朝鮮半島との関係で申しますと、大野城の麓の平地城と後ろの山城というこういうセット関係はですね、朝鮮半島の四つの国の中でも一番北にあった高句麗の山城と共通点がございます。共通点と申したのは、北朝鮮の首都のピョンヤン、平壤ですけれど、その郊外に安鶴宮あんかくきゅうという平地のお城があって、その後ろに大聖山城たいせいという山城がセットになっているんですね。そういうことから言えば、どちらかという大野城は高句麗との関係があるのではないかということ。

それに対して鞠智城の場合は、比較的低い所にあり、丘の上に役所等々の重要施設があります。つまり日常的な平地城と逃げ込んで籠城する山城が同じ場所にあるという点ではですね、お隣の百済の最後の都があった現在の扶餘ですね、ここの扶蘇山城には538年に遷都いたしますけれども、その前の都は公州と言い、そこに公山城というのがございます。武寧王陵で有名な所でございます。公山城も同様に低い丘の上に宮殿等々、主要建物と山城が一緒になっているという点がございまして、鞠智城の造営にあたっては、百済の扶余とか公州、当時の熊津ゆうしんといったものが起源・ルーツになっているのではないかと考えております。

いずれにしても鞠智城の調査成果がもたらす情報というのは計り知れないものがございまして、日本の古代山城のみならず、北東アジアの古代山城の研究にとりましても非常に重要な位置にあるということを改めて強調をして、私の話を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

③ 歴史公園としての古代山城の整備

日本城郭研究センター名誉館長 田中 哲雄 氏

おはようございます。今ご紹介にあずかりました田中です。まず、私自身の間違いで申し訳ないんですが、今の現職は厳密にいいますと日本城郭研究センターということで、城郭とセンターの間に研究が入ります。よろしければ入れてください。事務局ではなく、私の間違いです。申し訳ありません。これはどこにあるかというと姫路城ですね。世界遺産にもなりましたし、特別史跡でもあります姫路城の中にあります。この城郭研究センターが作られることになりまして当時の文化庁の調査官が、姫路城は特別史跡ですから特別史跡の中にそういうものを作るのはまかりならんということで、最初は反対されたんですけど。まあ、城郭全体の研究をするのであればいいだろうということで、そこに建てたわけです。それなら単なる城郭研究センターではなくて、日本城郭研究センター、日本全体の城郭の研究センターにしろということで、姫路の特別史跡の中に許可をもらって建ったところで、私は今そこに非常勤ですからほとんど行ってないんですけど、おります。ちょっと間違ったので姫路城の宣伝というか、ご存知の通り、今姫路城は国宝の大天守の修理、昭和の修理に続いて平成の大修理というのを行なっております。だから、現在姫路城に行かれても天守閣は見えません。周りに足場が組まれて足場の外にシートをかけて、そのシートの上に原寸の写真から絵を描いてありますのでそれで想像するのと、横の足場の中にエレベーターがありましてエレベーターで上がっていくと、今、修理している現場の様子が即、そばで見られるという状況になっています。だから、公開型の修理だという事で姫路市は威張っておりますけれども。先ほどの平城宮1300年祭で大極殿を復元したわけですけど、途中全部覆われて完成した姿だけを公開するのはなかなか望ましくないという事で、大極殿の時も棟上とかの時は現地説明会をして公開していると思いますし、公開するだけ

でなく往時の技術ですね、木の削り方とか用具とかいうものも展示しております。姫路城でもそのエレベーターを上がったガラス越しに現場が見え一方、横で映像の機械がありまして、主に今回の修理は瓦の葺き替えと壁の塗り替えという工事なんですけれども、その映像装置が側にあってそういう技術とか用具の説明も合わせて行なっております。

それから、もう1つこの城郭（研究）センターの役割として、古代山城の中でも石垣の遺構、神籠石もそうですが、水門のところ、鞠智城でも部分的に石垣が出ているというお話が出ましたが、建物の技術者は宮大工さんとか聞いたことがあると思いますがそういう専門の技術者がおられたんですが、石垣の専門の技術者というのは今までなかなか、どんどん減っていくだけで、なかなかつかめていなかったんです。3年前に文化財石垣技術者協議会というのが立ち上がりまして、2年前に文化庁の選定技術、宮大工さんと同じような、石垣が選定技術ということで指定されております。その事務局がこの日本城郭研究センターになっておりまして、石工さんの演習、各地の石垣の修理現場で演習をしたり、養成したりということを行なっております。宣伝で時間が長くなると時間がおしておりますので。お手元の資料「1公園と歴史遺産」の資料があると思いますが、そのページでほとんど説明はいっぱいだと思います。

公園と歴史遺産の関係の中で整備というものが歴史の中でどう進んできたかということを説明ができればと思います。公園とはそこに書きましたように、レクレーションの場ですね。いろんな休養とか、散歩とか



講師の岡田 哲雄氏

運動をしたりとか。最近では広域避難所という役目も果たしているということですが、公共財の役目をするのが公園の役目という事で、歴史遺産についても、過去の人間の営為を学ぶ場所ということで同じような公共財だと

思いますし。公園に来るといふ事は、そういう空間をデザインすることなんです。遺産を整備するといふ事もやはり過去を学ぶ場所をデザインするといふことで、まあ、そういう意味で共通の意味合いがあるのではないかと思います。それから、歴史的にみると近世では大名が、水戸藩の徳川齊昭という人が借楽園、みんなが楽しめる公園といふことで、常盤公園ともいいますけれどもそういう一般の人が楽しめる花見とか遊園したり遊覧する場所として開放したといふ、松平さんの南湖公園（福島）もそうなんですけれども、四民共楽と書いてありますが全ての人が楽しめるという場所が近世の公園の役割だと思ひます。

明治維新になりますとご存知のように近世城郭が壊されます。その跡に公共施設、博物館とか美術館とか市役所とかいろいろな施設が入ったりする事があるんですけども。同時に近世の城郭といふのは周りに城下町があって市の中心になるわけですから、セントラルパークといふ事で総合公園なんかが作られて、運動公園も含めてですねそういう時代があります。それから近世に同じように城郭の櫓とか門とか破却されて撤去されるわけですね。だから少し広いスペースになるわけですけど、その広いスペースを利用して城郭庭園といふものが作られる事があります。秋田の千秋公園なんていふのが久保田城といふお城の跡に造園家の長岡安平といふ有名な人なんです、その人が設計して庭園を作ったといふような事がありました。それは全国的にいくつかのところで見られます。明治になると大名の別邸が、東京の小石川後楽園とか岡山の後楽園とか金沢の兼六園。それから熊本でも水前寺成趣園といふのが細川さんの別邸の庭園が一般に公園として開放されるという歴史があります。

それから、公園が最初に作られるのは明治6年に太政官布達が行なわれるわけですけども、そこに書きましたように上野公園、浅草公園、これはまあ近代化に伴うレクリエーションの場を作るという目的と、今まで花見とかそういう楽しみの場所であった所を公園にするといふような事で作られたわけです。当然、お寺のお堂とか門ですとか有形の建造物の文化財もございまして、それからお寺で行なわれる行事とか大祭とかもありますし、名勝地ですね先ほど言った花見とかの場所といふ名

勝地。それから境内地という史跡という。すでにこの頃から総合文化財としての捉え方というのが、こういう公園の視点の中でもみられているということがわかります。それから偶然でしょうけれども、大正8年にこの公園の基本となる都市計画法が作られますが、文化財の初めの前法といわれる史跡名勝天然記念物法というのが大正8年に作られますね。同じ都市計画法と史跡名勝天然記念物法が、同じ大正8年に作られるという偶然があります。そういう深い関係があるということ。昭和48年になると、鎌倉、奈良、京都で古都保存法が作られて、歴史と風土に関する特別保存措置というのが作られます。これはその当時公害問題が出て、環境権、特に歴史の場合は歴史的景観権みたいなのが大事だということで、町並みの保存なんかが行われたということです。史跡についてはこの頃公有化された史跡が荒地になっているという事で、何とか整備しなくてはダメだという事で、有効活用ということで若干公園の機能を付して史跡が整備されたということで、史跡公園という名前。この頃初めて、40年代に初めて使われた言葉と思いますが、いくつか整備が行なわれています。当初の段階でこの大宰府なんかもそうですね。大規模遺跡で、平城京、大宰府、多賀城なんかがそれにあたるといいます。それから昭和51年に国営公園。国営公園というのは大規模な、多数県にまたがるような大きな規模のと、もう1つ口号というのがありまして、そこに書きましたように日本の固有の文化的資産を保全活用するための国営公園ということで、飛鳥、それから吉野ヶ里遺跡、沖縄の海洋博と共に首里城ですね。それから平城宮が平成20年に国営公園として指定され国営公園としての整備が行われます。平成20年に歴史町づくり法、この山鹿市でもこの法に基づいて新しい計画を作られているというお話をされましたけれども。歴史町づくり法というのは厳密に申しますと、地域における歴史的風致の維持と向上に関する法律ということになっております。その目的は下に書きましたように、文化財を総合的に把握して、総合的に把握しというのは、今までは1つの遺跡に限ってどうしようかという話を有形・無形に限らずいろんな要素を持って文化財を捉えようということです。周辺環境と一体化したというのは、遺跡だけでは

なかなか雰囲気を守れないので、要するにバッファゾーンですね、その周辺環境も平行して守ろうという事です。それともう1つ大事なことは、歴史・伝統を反映した人々の活動を一体としての街づくりということで、その地のおられる伝統的な産業とか伝統的ないろんな祭りとかを含めてですね、そういうものを含めた街づくりをしよう。要するに、総合的に捉えるというのと、環境を捉えるというのと、地域の人、周辺環境で言いますと空間文化財みたいな感じですかね。それから、歴史伝統という事では人の文化財といえますか、そういう要素が歴史町づくり法には入っているという事です。これからの整備にとって先ほどの3点はかなり重要な事だと思います。それから、この町づくり法でよかったのは、今までは行政が違くと縦割りの行政でなかなかうまく関連できなかったんですが、今回は文化庁と農林省と国交省が合わせてこの計画に基づいて施工を行うということで、縦割りの弊害が少し無くなったという利点があると思います。そういう歴史町づくり法ができあがって山鹿市でもすでに構想を作られて対応されているということで、よくご存知の事と思いますけれどもそういう関係があります。

それで今まで見てきますと、タイプとして、史跡を整備してもなかなか施設が無い以上は管理条例とか要綱とかは作りづらかったわけですね。そういう意味で、公園にして公園の管理条例、要綱に従って管理するというやり方と、ソフトな公園のやり方というのは要するに遺跡の場の保存ですね。遺構を埋藏したままで道とサインを作ってオープンスペースとして公開するというやり方があります。それから国営公園の吉野ヶ里などは復元がかなり増えたハードの整備。それから大規模な遺跡ですね、古墳群とかそれから城山みたいなお城、かなり広域な面積を持つ遺跡ではその中心部分だけでなく、周辺も一緒に公園にして環境保全をするという、そういうやり方の守り方が行われているという事です。そういう4つくらいのタイプがあるということです。

時間がおしていますので後ろのページの方向性については、次の討議の中で適宜言わせていただければと思います。ちょっと急ぎましたけれど、私の話は終わります。ありがとうございました。

■第3部 パネルディスカッション

古代山城の保存と活用を目指して

司 会：佐藤 信（東京大学大学院教授）

パネラー：西谷 正、田中 哲雄

佐藤 どうもありがとうございます。それでは時間がおしておりますが、12時までの時間を使って西谷先生、田中先生をお迎えしてパネルディスカッションをしたいと思います。全体としては、古代山城の国際性とか歴史性についてどう考え、それについて今後どういう課題があるかということのを第一のテーマとして、それから古代の山城や鞠智城の整備や活用がこれからどのような課題を持っているかという事を第二のテーマとして話していきたいと思います。

今日のこの場でも城北小学校の発表や、熊本県教育委員会の矢野さんからの調査成果のご報告があつて、鞠智城の歴史的な意義が明らかになってきていると思います。今日、最初に20以上のそれぞれ古代山城を持つ自治体の首長さんたちがお集まりでありましたように、全国的に主に西日本に30にもおよぶ古代山城が7世紀後半の短い時間帯にあつたという間に建てられました。しかも、今日的にみるとそう簡単にはできないようなものではない立派な構造を持つものが短期間にできたということでありまして、これはちょうど白村江の戦いの後の倭の日本列島におけるものすごい緊張感、唐と新羅の連合軍が攻めてくるかも



サミットタイトル

しれないという緊張感がこういった山城に結びつくわけです。その過程が、ちょうど日本の古代国家、私どもは律令国家と言ったりしますが、それが形成・確立する過程とまさに重なっているというこ

となのです。

つまり、古代山城を作ることによって日本の古代国家が確かなものになっていったというような、まさに日本古代史、蒲島知事さんの話にもありましたけれど、日本の歴史を考える上で非常に重要なキーワードが古代山城であると言ってもいいと思います。それぞれの古代山城が史跡に指定されているわけですが、文化庁の規定によれば、史跡というのは「わが国の歴史を知る上で欠くことのできない遺跡」、これが国指定の史跡になります。つまり、日本の歴史を理解する上でそれがなくなってしまうたら日本の歴史がわからなくなってしまう、これがそれぞれの古代山城の史跡という事であると私は思っています。そうしてみると、こういった史跡がどのようなものであったかという事を理解することによって、私たちは日本の歴史を正しく理解できる。これから日本がどのように進んで行こうかということを考える時にも、大いに参考になるのではないかと思います。そのためにも、史跡の発掘調査および研究、あるいは保存管理、それから史跡の整備・活用、そして発信といったものが求められているのだらうと思っております。

そこで、先ほど申し上げた2つの大きなテーマに従っていきましょう。まず、古代山城は東アジアのものすごい国際的緊張の中で作られた。日本の古代国家もそういう中で形成される。日本列島の中だけで古代国家ができてくるのではなくて、国際的な関係の下で日本ができてくるということであろうかと思います。それを古代山城の歴史の中でど

ういうふうに理解するかということについて、もう少し西谷先生にご説明いただけるとありがたいのですが。例えば、古代の山城を理解する上で、西谷先生は今日のお話の中では大野城が高句麗の城に似



ているのではないか、あるいは鞠智城は百済のお城に似ているのではないかと指摘されましたが、私たちは大野城は『日本書紀』に百済の亡命将軍のノウハウ、指導の下で築城されたと思っていたので、高句麗的なものというともたまたまどういう関係になるかということが気になります。これは朝鮮半島における山城の研究に日本で一番詳しいのは西谷先生ですので、そういうことも踏まえて古代山城の国際性、それから鞠智城でもご指摘いただいたのですが、百済との関係は具体的に遺構や遺物のどういうところで捉える事ができるのかということを含めて、西谷先生、補足していただければと思います。

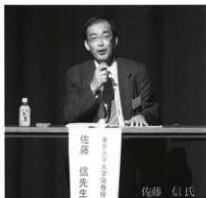
西谷 古代山城はですね、日本古代史を解く上で非常に重要な要素だと思っています。それも国際情勢、今お話があった通りの中で築かれたということで、おのずから朝鮮半島を中心とする北東アジアに目を向けざるをえないんですね。で、高句麗との関係で言いますと、この時代になると日本で仏教が浸透しつつあって、あちこちにお寺が建ち始める状態ですね。日本の古代仏教というと百済仏教との関係は、みなさん異口同音におっしゃるんですけど、実は高句麗仏教も非常に重要なんです。これは飛鳥にある法興寺、今、飛鳥寺と言っている、あそこのお寺を建てる時に高句麗は金300両を送ってきているんですね。それから伽藍配置も高句麗のお寺と共通点がございます。それはつまり、新羅がどんどん勢力を拡大していくという中で、百済と北の高句麗は新羅をけん制するために日本列島、倭と手を結ぶんですね。百済と合わせて高句麗も複眼的に考えていく必要があると思っています。熊本県といえば装飾古墳が日本で最もたくさんある所ですが、福岡にかけての装飾古墳の中に高句麗の壁画の要素が入ってきたりしているんですね。そういう意味で、まず、私は高句麗も視野に入れて考えいく必要性を強調したいと思います。

そこで、先ほどはご説明できませんでしたけれども、八角形の建物につきましても朝鮮半島で山城で2箇所見つかっています。その1箇所が高句麗の中頃の都があった、現在は中国に入っていますが、吉林省の集安という所で、そこの山城の中に八角形建物がやはり2棟で

すね。この2棟というのは非常に意味があると思っているんですが、2棟見つかっておりまして、これが最も古い山城における八角形の建物です。もう1つはソウル郊外、東南方向に14.5km行った所に二聖山城という山城がございまして、そこで八角形他、多角形の建物が見つかっています。これは百済が滅んだ後、その地域に新羅が支配者として入ってくるわけですね。その時の新羅の城ではあるんですが、そういうのがございまして、新しくなりますと新羅を含めて、鞠智城が作られた時代から見ますと、高句麗も視野に入れて考えていく必要があると、そのように思っております。そして、先ほど貯水池のお話をしましたけれども、これにつきましても高句麗の山城の中には、本当にプールのような大規模なものが、今でも山の頂上で水を満々と湛えられています。周りにきちっとした護岸があつてですね、そういうのがございます。

いろんな意味で高句麗をやはり視野に入れていく必要があると思うのです。百済との関係については、これも最も歴史的に稲作文化が始まった2千数百年前から、百済のかつての地域というのは長い間に渡って歴史的な関係があるわけでございます。そういうこともあつて百済の存亡の危機に際して、倭が、日本列島が支援・救援したということで、いろんな面で百済との関係が指摘できると思います。鞠智城に関して申しますと、先ほど申しました百済系の瓦、そして百済系の仏像、さらには秦人木簡につきましても百済の可能性もあるということでございます。

佐藤 ありがとうございます。日本列島の古代山城を理解する上でも、朝鮮半島の古代山城を高句麗、百済、新羅というそれぞれの山城として研究しないと見えてこないということかと思つています。そういう意味でも古代山城は国際的な遺跡であるというふうに言つていい



のではないかと思います。ある意味では史跡整備の際にはそういった国際性も見通せるようなことが求められるのかなという気もするのですが、田中先生、そういった古代山城の歴史的な性格を史跡整備の中で表現するとしたら、どういったような事が可能かと申しませうか、何かお考えがあればお話しいただけるとありがたいのですが。

田中 不勉強なもので国際性のことはよく分からないのですが、国際性を表現しようとする時にはやっぱりネットワークとして海を含めて百済との連携をどうするか、といったネットワークの中での位置づけと技術ですね。百済の技術が直接入ってきた技術か。特に神籠石なんかの石組みで、採石の技術とか、積み上げの技術とか、それから加工技術というようなもので見られるかどうかが、大事な検討課題になってくると思います。

佐藤 只今の技術の問題ですが、これには例えば石垣を築く技術とか、先ほど西谷先生が話された八角形の建物が2棟あることに意味があるとおっしゃられた建築技術などがあります。技術の面では、例えば古代山城における確実に半島の技術だとして、例えば土を固める版築技術ということが言われています。石垣を築く技術、建物を建てる技術、あるいは瓦を焼く技術でもいいのですが、古代山城は総合的な技術体系の成果として成り立っているという事になります。それぞれの分野に様々な技術が^{つぎ}込まれていると思います。その中で、半島から来た技術と在来の優が持っていた技術がどういう風にバランスを取っていたのか。あるいは、私は当時の人々はあつという間に外来の技術を受容して、山城の造営を達成したのではないとも思います。そのあたりの技術について、西谷先生、お話しただけないでしょうか。

西谷 一言でちょっと大雑把に言いますと、朝鮮半島は石の文化とよく言われますね。それに対して日本は木の文化です。石の文化と言われるように古代朝鮮の山城も石を築き上げた城壁が多いですね。そこで、石城^{せきじょう}という地名まで残っております。とはいえ、もちろん土を盛り上げて作った土塁の城壁もあるわけですね。日本の場合、大野城、基肄城、鞠智城は土盛ですね。ここの鞠智城につきましては今もお話

が出たところではありますが、みなさんのお手元の資料を開いていただきますと、右側の真ん中に版築土塁の出土状況という事で、鞠智城におきましても見事なですね、せき板で枠を作って丁寧につき固めていくという版築技法というのが認められているわけです。土を盛り上げて土塁の城壁を作るのを版築技法と言って、欠かせないんですね。そういう意味では、大野城と共にここでも良好な状態で確認されているわけですね。それから大野城の場合をみると、谷あいの南側、あるいは北側には部分的に石を積み上げていますね。これはどちらかというと石築ですので、石と土築を併用したというそんな感じなんです。いずれにしても共に朝鮮半島の古代山城の築城の技術であると思います。それを大野城の場合は、基本を土塁としながら部分的に石築にしているということです。それと、大野城と最も近い土塁が主体となる山城は、先ほどご紹介しました百濟最後の都の扶蘇山城に見られます。そしてその前の公山城、共に土塁ということで、版築による城壁築造という点でも同じように鞠智城と共通しているということがございます。私は技術的集団がやって来て、そっくり技術移転のような感じで日本の古代山城が築かれ、それが段々と西の方に、まず最初に大野城、基肄城、鞠智城、その後、金田城、屋嶋城が築かれます。そして、その地域地域の独自性が表れていくのではないかと思います。その辺の分析は今後の課題ではないかと思っております。

佐藤 それぞれの山城が地域的な特徴を示しており、それが今後の研究の課題だというお話だと思います。そういった技術は、倭人は自分のものにしたという事かもしれませんが、古代山城が大変な緊張関係の中で築かれた、その後はどうなっていくかという点については、西谷先生、いかがでしょうか。

西谷 先ほど、鞠智城に関して矢野さんからご紹介がございましたようにずっと後世、平安時代まで記録に出てまいりますので、その後も引き続き利用されている。築城のきっかけは大陸から侵攻してくるかもしれない心配ですが、出来上がってしまうと、その次の時代の新羅と奈良の時代は、基本的には友好、平和的な関係ですけれど時々兄

弟ケンカのように中の悪い事もあるわけで、いつそういう事が起きるか分からないという事で、引き続き防衛という意味での、特に九州の場合でいいますと大宰府の防衛という意味での機能は継続される。

そして、鞠智城の場合の重要性はですね、平安時代9世紀まで記録に出てくるという事は、私はこの鞠智城を築城拠点としてさらに南九州、もっと南の種子島、屋久島とかですね、そういった南方系の基地として新たな役割、価値が上がっていくのではないかと。大野城、基肄城、金田城などあの辺りは間違いなく大陸を意識しているわけですが、鞠智城の場合はそういう大陸を意識してですね、北の守りとして大野城、基肄城、南の守りとしてこの鞠智城という。私はそう同等に考えているんですけどね。よく大野城、基肄城の後方兵站基地と従属的に考えられる人が多いんですが、私は同等に考えているんですけどね。もちろん、ルートの歴史的なパイプ、太さは違いますけれど。そういうこともあって、更にここを拠点の南九州に向けての地域の当時の拠点にしていくという、新たな機能が加わるのではないということ推測しております。

佐藤 鞠智城の最前線としての位置は、対外的には有明海からの進入との関係と考えるとよろしいでしょうね。それプラス南の方に向けた前線基地であるということですね。私も、この古代山城はいずれもものすごい緊張感の下で最前線に築かれているのではないかと思います。昨日改めて鞠智城に登らせていただいて、大変肥沃な菊池川流域の豊



かな平野が見渡せるのでして、今は平和な感じがするのですが当時はものすごい緊張感の下で造営工事が急がれていたのではないかと思います。即ち、古代山城はすべて最前線基地であったとみてよい

かと思います。今の西谷先生のお話もそういう方向だと思います。

それでは、技術の話については終えまして、次に田中先生の整備の話に進めていきたいと思います。先程のお話からも、歴史の何を整備するのか、あるいは訪れた方にその史跡で何を感じていただくか、学んでいただくかという事がやはり重要かと思いました。現在、鞠智城でも鼓楼とか兵舎とかの建物を復元して建てていたり、その説明をするサインや説明板も設置していたりしているわけですが、そういった形の今ある整備、そして、これから更にどのように整備されてゆくべきか、田中先生が先ほどのお話で後に残しておかれたので、例えばソフトからの整備についてご説明などを少し補っていただけませんか。

田中 課題から先に言いますと、古代のこういう山城の保存面の課題というのが1つありますよね。大野城が数年前に石垣が雨の関係ですかね、石垣が流失したというのがありました。もう1回くらいあったんですかね。それから、岡山の鬼ノ城が、これは整備した後のなんですけど、復元した土塁、遺構の土塁の上に復元した土塁が壊れたというのが整備の手法のまずさというのがあったと思うんですが。だから保存面の話として、特にこういった防衛の貴重な遺産は、最近、自然災害が異常な気象災害というのが起こってまして、降雨被害の話とかありますので、特に大野城なんかは水系の、これ以上大雨が降っても壊れないような、もともと水系の整備が壊れていてというのものもあるんじゃないかと思うんですが。そういった水系の整備のような基本的な遺構の保存上の手当てのようものが大事な話になってくるのではないのでしょうか。それから、鞠智城もそうなんですけど岩盤とか地質がもろくて、それがのり面になっているとかなり不安定な状況で



壊れてくるというような場所が何箇所も見られます。中世の山城でもそうなのですが、急崖部とか切岸が防衛ラインになるわけですが、そういうものが不安定になるということで、場合によっては壊れた時に保存修理をしなければならないという事が、多々出てくると思うんです。現代風なりの面の処理というのはかなり進んできて、いろんな方法があるのでできない話ではないんですけど、ただ、あくまで現代的なものを入れるとお城として景観的な雰囲気は壊れるという事があるので、景観的な雰囲気をできるだけ守れるような保存工法の選択みたいなのが当然必要になってくるのではないかと思います。

整備面での課題として、山城整備で何を表現しようかとすると1つは立地の特色ですね。要するにどこに立地していてどの尾根のライン、谷のラインを利用してこのお城が作られたとか。鞠智城は低くて他の山城とは違うとは思いますが。それと交通の要所になっているとか、古代道の脇にあるとか。河川との関係というのもそうでしょうね。瀬戸内海の関係もそうなんだと思うんですが、そういう立地上の特色みたいな話と。後、さっきから言われている機能面で防衛のラインとしてどういうラインが見えるかという話。防衛だけでなく政務、特に鞠智城なんかはそうだと思うんですが、政務的な空間がかなりあるんじゃないかと思うので、その表現、機能の表現。

あともう1つ大事なのは景観の話で、中世の山城でも古代の山城でもそうなのですが、中に入ってしまうと自分がどこにいるのかなかなか分かりにくいというか、位置が掴めないというのがよく出る質問だと思いますので、できるだけ自分がどこにいるかわかるような、これはサインの工夫でもあるんですが、パンフレットなんかの工夫でパンフレットと現地が対応できるような工夫が当然必要で、そうでないとこのどういう地形の中にいるかという事の話があると思います。

今の景観の話で、お城の中の景観としてお城の中で具体的に防衛ラインがどれだけ見えるかという感覚と、お城を外から見た時にお城の立地がどれくらい理解できるかという話と、城の外からお城を見た時にどのくらい防衛ラインとかが分かるかという景観的な工夫ですね。そ

のために植生管理というのが大事な要素なってきます。植生管理を含めた検討が、山城の場合特に必要などころではないかと思えますね。

佐藤 ずいぶん貴重なご意見をいただいたのではないかと思います。古代山城はどこにでも作ったのではなくて、この場所が一番戦略的にも戦術的にも素晴らしい場所だという、その場所に正に築いているはずですね。土塁を築かなくてはいけない所、防御を固めなくてはいけない所、門をどこに設定するかを始め防衛の機能を最大限に発揮するよう配置する。これは手を抜くと落城するわけで、命が無くなるということですから、万全の手を使って、当時の最高のノウハウ、最善のノウハウで築城されていると言って差し支えないと思います。その際に見張る場所も必要ですし、あるいは外から攻めてこられた時にこれは難攻不落で諦めようと敵が思うような形の、言わば“見せの施設”のようなものも恐らく考えなくてはいけないと思います。鞠智城の場合、外から城門が見えないような配置になっている城門がありますが、そういったことも含めて、現地を訪れる方が歩かれれば、そういった古代の防衛のための工夫の知恵が随所に感じられるような整備ができていけばいいと思います。

一方、整備の場合、建物を復元する事を含めてそれはハードということになると思うんですが、田中先生のおっしゃるソフトな整備というのは、例えばどういう方向のことをお考えでしょうか。

田中 私のプリントの裏側に整備の方向性と書いてまして、そこにはハードからソフトへということを書いているんです。要するに何を作るかではなくて、何のために作るのかという発想がないと、作ってしまっただけでどう使うかという話をしたってあまり意味がないと思いますのでそういう意味で、もし作るのなら何を作るのかというそういう原点の発想が必要だと思います。それから、作らなくてもそこに書いていますように遺跡を知る事ですね。どういう具合に知ってもらうか、具体的に知ろうとするのか、そのために情報発信、普及・啓蒙というのが大事なのでいろんな情報システムがあると思います。最近はホームページ、鞠智城もホームページがあると思いますが、ホームページに

対してのアクセス数なんかをチェックするという事が大事だと思いますし、ブログで提案やアンケートだったりとかもあると思います。東北の方でもそれぞれホームページを作ってアクセス数をチェックされたりしています。

それからここでも“ころう君”ですかね、マスコットキャラクターが作られてて、東北でも志波城の“しわまろくん”とか、徳丹城では“わたまろくん、”とか、来年徳丹城は1200年祭を行うという事で着ぐるみなんかを作られていて、ブログでマスコットキャラクターの審査があるんですよね。だから“ころう君”も多分登録されればその中でどのくらいに順位付けられるかというのが決まってくると思うので、ぜひ登録してもらえれば。そういう小さな普及・啓蒙のあり方も含めて広く有効にすることがあると思うし。それから参加することと書いていますが、これは参加する機会をできるだけ行政がつくる必要があると思うし、あまり強制的に教育という立場で押すのではなくて、いろんな工夫をして参加してもらおう。特に山城の場合は、自然、動植物、地理、地形、歴史という3つの要素を全て含んだ総合教育のできる場所だという特色があるわけですね、他の遺跡に比べて。だからそういう利点みたいなものを当然生かす必要があるんじゃないかと思います。

それから、そういうソフトからの発生をする事によっていくつもの参加ができて地域の宝である、自分としても残したいものであるという意識が芽生えて、この遺跡を将来残したいというそう意識がでてく



ころう君たちとの記念撮影

るんじゃないかと思いますね。だから押し付ける教育ではなくて自発的に参加出来るようなやり方が大事だと思いますね。その下に住民参加のあり方みたいな事を書いています、昔は整備して出来たも

のに対してボランティアガイドをして欲しいとかという管理運営面で住民参加が多かったんですが、最近は当初から住民参加というのが増えていまして、特に調査段階から参加というのが、兵庫県でやっていますがヘリテージマネージャーの養成というのがあるんですね。これは建築についてなんです、残っている古い建築が調査できるように養成講座を1年近く行なうわけです。そこで学んだ人が技術を身に付けて、建築の調査を行なって点検とか登録文化財に指定にした資料を作るみたいなやり方で調査から参加されているという事で、そういう工夫も必要だし。それからワークショップは最近どこでも行なわれますけど、特に出来上がってからではなくて、企画・計画の段階で住民と一緒にどうしたいという話をまず聞いてもらうというのが大事だと思います。突飛な意見も出るかもしれませんが、それはちゃんとこういう遺跡だからと話を説明して理解してもらいながら行くということで、おもしろい意見が出る事もございますので、ぜひ、そういう事も考えて採用していただきたいと思います。

先ほど版築の話も出ていましたが、具体的に整備・施工する段階での参加というのもあって、東北の志波城なんかでは版築の模型がございまして、常にお客さんが来たら版築を実施してもらおうと。突き棒があって、土があって実施してもらおうという、施工の面での工夫のようなものもございまして。あらゆる段階での住民参加ができる工夫みたいなものが大事じゃないかと思うんです。

佐藤 市民参加もこれからの史跡では非常に重要ではないかと思えます。また、行政もそれに対応するような形で、ハードという面だけではなくて人を得なくてははいけないという気もいたします。段々、時間も無くなってまいりましたが、ここで古代の山城、鞠智城、その2つに渡ってこれからの調査・研究・保存・整備・発信の課題について、先生方はどうお考えになっているか。古代山城がこうなって欲しい、或いは鞠智城がこうなって欲しいという期待みたいなものを、西谷先生、田中先生の順にお話だけないでしょうか。まず、西谷先生、調査や研究の課題も含めてお願いします。

西谷 只今の田中さんのお話を聞いて関連したことを申しますと、やはり幾ら立派に史跡公園として整備されても、それを生かすも殺すもソフト面の企画が大事だと思うんですね。それで今もご紹介がありましたように住民参加とかいろんなイベントを行なうとか。

最近ですね、ある新聞の経済面を見ておりました。鳥取県の境港という水木しげるさんのゲゲゲの鬼太郎ですか、あそこが当初2万とか20万とかぐらいだったのが今は何百万人という人が来られているんですね。その状況を境港市の観光協会の会長さんが文章を寄せておられてまして、この成功の要件は3つあると。その1つはですね、お役所には頼らないと。今日はお役所の方も大勢いらっしゃいますが、お役所には頼らないこと。住民が自主的に企画してどんどんやることです。つまり観光協会とか婦人会とか商工会議所とかいろいろありますから、そういう住民の方々が主体的に自分たちが企画してやっていくということが1つですね。そういう意味では昨日の山城サミットで大宰府さんが紹介された中で市民遺産という言葉がありました。市民の方がこれは国指定でも県指定でもない自分たちの大事な文化財なんだと、市民遺産というのを調査して研修して選んでですね、みんなで認めていこうという試みが行なわれております。そういう住民主体の活動ですね。

それともう1つ境港の人がおっしゃっているのは、いろんなイベント



や企画を連発するという。途切れもなく年中やっているということをおっしゃっておられました。そういう意味では、京都駅からタクシーに乗りますと、どこから来たか（とタクシーの運転手に聞かれるので）、博多から来たと言いますと、博多はなんか活気があるそうですねと言われたんですね。そう言われて振り返ってみると、博多という所は祭りが好きで、年中大きな祭りをやっていますね。博多

どんたくから放生会からですね。それでも足りないというので、20年ほど前に9月をアジアマンズと設定してアジアをキーワードにあらゆる分野でのイベントをやっています。年中やっているものですから、1つ終わると次の準備が始まります。そういう形で交流人口が増える。あるいは年寄りから子どもまで一緒になって参加しながらやっておられるということもございます。

そういう意味では昨日の“狼煙^{のろし}リレー”は大変素晴らしい事だったと思いますね。専門的な立場から言いますと、大宰府から鞠智城まで新幹線の速さでリレーできたわけですね。こういうことは初めて、私はこの目で確かめました。専門的な言葉で言いますと、実験歴史学という言葉は聞いたことがありませんけれども、実験考古学とでも言えましょう。そういう実際に実験によって、理屈ではなくて確かめるということで非常に勉強になりました。あのリレーをやられるのについては、事前のいろんな準備から手続きから、当日も大勢の人が各地で係られました。この山城サミットに来たいけれども現場の狼煙上げに携わるとかですね。実に多くの方々、いろんな分野のいろんな階層のいろんな年齢の方々が一丸となってやられた成果の賜物だと思います。あれはぜひ、今後、継承・発展されていかれたら、その過程ですわね学ぶことがいっぱいあるんじゃないかと、またそこからいろんなアイデアが出てくるんじゃないかということを感じました。

これからの研究の調査・課題ということでは、これは自明のことですが、古代山城が7世紀後半という北東アジアの国際情勢の所産であるということから、国際的な視野でもっともっと推進してくということだと思わなすね。昨年^の第1回古代山城サミットにはそう



盛り上がる討論

いう意味もあって大野城市さんは韓国の山城研究の第一人者をお招きになりまして、韓国の情報、研究成果を私たちに教えていただきました。そういう事で、直接的には韓国との学術的な、あるいはお互いの史跡見学の交流をやるとかですね、そういう国際交流という面でも今後はやる事がいっぱいあるのではないかとそういうふうに思います。

田中 私のプリントの最後に書きましたけれども、こういう遺跡は一過性で1回来たら終わりという事が多いんです。そうじゃないように年間通して利用できるような工夫が必要ということで、鞠智城暦づくりと書いてありますが暦づくりのようなものを、今の狼煙リレーとかもそうですね、どこに入れるかという話も含めて。暦づくりをして年間を通していろんな伝統芸能とかを含めて利用できるような、そういう工夫が必要です。暦づくりをしますと年間を通して動いているわけですから、いつ来ても何らかのイベントが見られるとか、伝統行事に参加できるとかがございますので、そういうことが大事だと思います。

それから西谷先生も言われましたが、一番大事なのは町づくり法で、歴史伝統を反映した人々の活動というのが一番大事なことだったりする。これは、遺跡の時代から引きついでできたもの、伝統産業もあると思いますし、変質化しながらつながってきたものというものもあると思うんですね。場の歴史性みたいなものも少し大事にして考えないといけない。あんまり遺跡の時代だけにこだわるのではなくてという事もあると思います。

さっきこの劇場を見て、上にいっぱい広告があるんですけど、たぶん無くなったお店も多いんだと思うんですが、どういう商売をやっていたかというのはよくわかるので、こういう産業があったんだなあということはわかりますので、つながりみたいなのが少し分かります。そういう場の歴史性みたいなのが大事ですし、必要があるんじゃないかと思います。地域の人が支えたいものだという意識が生まれないと、なかなか保存というのは難しいと思います。そういう意味での工夫というのが、そのためには地域の人にできるだけ参加してもらいたいものが必要になってくるのではないかと思います。

佐藤 いろいろな工夫を展開していただき、さらに今日の報告会でもうかがえたように、西日本の多くの古代山城を持っておられる自治体で、それぞれ調査・研究成果、整備について様々なノウハウをお持ちだと思いますので、そういったものを総合してネットワークの力でこれから古代山城の価値がさらに再現していけばありがたいと思います。



九州国立博物館での展示

また、古代山城が存在するのは西日本なのですが、防人などは東国の人々が防衛のためにこちらに多く来ている訳でありますから、決して地元西日本だけじゃなくて列島全体、東アジアに広がった世界の中で、この古代山城を理解していただければと思います。

時間をちょっと過ぎたようでありますので、これでパネルディスカッションを終わらせて頂きたいと思います。両先生、どうもありがとうございました。

以上

古代山城サミット山鹿・菊池大会 講演会記録集

2012年3月31日 発行

■編集発行 熊本県教育庁文化課
熊本市水前寺6丁目18番1号



この電子書籍は、古代山城サミット山鹿・菊池大会講演会記録集 を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：古代山城サミット山鹿・菊池大会講演会記録集

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦 2024 年 7 月 20 日